



2002年度総会

北海道の労働と福祉を考える会



2003年5月6日(日) 9:00

札幌市公会館

## 2002 年度 総会資料目次

### 第 1 部 ～今年度の歩み

#### 開会のあいさつ

1. 今年度の歩み
2. 定例支援企画報告
3. 北海道民医連との協力
4. 生活保護申請同伴結果のまとめと課題
5. 行政との関わり
6. 2002 年度の会計報告
7. 広報活動における今年の活動報告と課題

### 第 2 部 ～来年度に向けて

8. 来年度の課題と方針
8. 会の運営に関する課題
9. わたしと労福会
10. 来年度の役員紹介

※資料～2002年度夏の人数確認調査の報告

#### 閉会のあいさつ

## 1.今年度の歩み

今年度の活動の重点は、「路上生活者に関わり続けること」という会の設立当初以来一貫して持たれている方針を維持しつつ、当事者の「脱路上」を目標に、昨年度までの活動により明らかにされてきた生活保護の申請の困難さに会としてどう取り組んでいくかということに置かれていたと思います。

この問題については、第一に、制度を運用している行政に対して「生活保護を適正な手続に従って適用することを促すとともに、健康問題や住居問題に対してもなんらかの策を講じるように働きかけること（会報 No.6「事務局長あいさつ」より）」を前年度に引き続き要望してきました。その成果の一つの表れとして、民医連さんとの協力により行なった「年越し健康祭り」に関して、市が市民に対して行なっている「すこやか検診」を適用して検査費用を負担したことが挙げられます。さらに、札幌市は、ホームレス自立支援法の適用によりホームレスの全国調査を労福会に委託しました。このことは、行政側が会の活動を認め、協力を求めてきたということになります。

第二に、「脱路上」に関しての会自身、ひいては事務局一人一人の取組みとしては、支援企画などを通じて知り合った生保申請を希望する路上生活者との、区役所や病院への同伴、アパート探しを中心に、仕事の紹介（ごくまれですが）を根気強く行なってきました。今年度は市民の方々が積極的に同伴に参加して下さったため、学生だけでは中々乗り越えられない問題（窓口の相談、アパート探し等）、に関して随分助けて頂きました。その結果今年度は31名の方が生活保護を申請し、大半の方が実際に受けることができました。

しかしながら、数字の上では一見順調のように見える「生保申請同伴」も、支援のあり方として再考を要する時期に来ているといえます。路上から居宅へ移った方の中には、一人で生活していくことの困難さに直面し、途方に暮れている方もいるという話を耳にすることが少なくありません。この「脱路上後」の居宅生活での問題は、じつに、一昨年度から指摘されていましたが、今年度もまた、会として「自立」に関する活発な議論や具体的な取り組みができなかったことは見直すべき問題であるといえるでしょう。

以上のように、今年度は、会としての活動自体が拡大したとはいえませんが（下記の「今年度の活動内容」参照）、活動がマスコミなどを通じて、外部に知られることによって、毎回炊き出しのおにぎりや豚汁を作って下さっている静山荘の方はもとより、民医連さん、そしある企画、または活動に興味を持たれた市民の方との協力を得て「質」の向上を図ることができたと思います。特に民医連の協力により実現した年越し健康祭りは、外部機関との提携という意味でも、路上生活者の健康問題という意味でも、今後の支援企画のあり方に示唆的なものを含んでいたのではないのでしょうか。

## 2002年度の活動内容一覧

- 5月2日 第1回学習会
- 5月25日 生活健康相談会①
- 6月26日 第2回学習会
- 7月6日 人数確認調査
- 7月27日 生活健康相談会②
- 8月13日 会報「ともに生きる」No. 6発行
- 9月12日 札幌市保護課との懇談
- 10月19日 生活健康相談会③
- 12月21日 年越し健康祭り
- 1月25日 人数確認調査
- 1月26日 生活健康相談会④（フォローアップ企画）
- 1月27日～2月9日 聴き取り調査
- 3月15日 2002年度総会

## 2. 定例支援企画報告

### 概要

定例支援企画とは、路上で生活している人たちを対象に、食料、風呂券、衣類、その他若干の生活物資の配布、そして健康相談、生活保護申請相談などを行っている「生活・健康相談会」のことをいいます。今年度は、札幌市民会館を利用し、5月、7月、10月、1月の4回実施されました(詳細は表1参照)。

そもそもこの「生活・健康相談会」は、当会発足当初、大半の路上生活者が最低限の生活を送るのに必要な物資の多くが欠けていることや、健康上の問題点をいくつも抱えていることがわかったため、彼らの「脱路上」・「自立」のためには、「まず、こういった危機的状況を少しでも改善していくことが先決」ということで、はじまりました。

この「生活・健康相談会」を通じ、これまでなかなか接することができなかった路上生活者と私たちとの交流も回を重ねるごとに増えていき、その結果として、少しずつではあるものの、路上生活者問題の現状とその課題についてみえてくるようになりました。さらに、当事者のなかからも、「いつもの企画を楽しみにしている」といった言葉も聞かれるようになり、当事者の精神面にも多少の影響を与えているといえます。このように「生活・健康相談会」は、当会と当事者をつなぐ重要な役割を担っているといえます。

また、「生活・健康相談会」の特徴として、医師による無料の健康診断を受けられる点をあげることができます。この健康診断は、問診、尿検査、血圧測定による簡単な検査ではありますが、路上で寝るといった過酷な状況のなか、体調の不安を感じてもお金がなく、診察を受けられない当事者にとって、現在、欠かすことのできないものとなっています。

### 具体的内容と反省

<表1 今年度「生活・健康相談会」の具体的内容について>

回	日時	参加人数	主な内容
第16回	5月18日	98名	食料・物資配布、健康相談、生保申請相談、2001年度聴き取り調査の報告会、手品披露
第17回	7月27日	109名	食料・物資配布、健康相談、生保申請相談、生保説明会
第18回	10月19日	84名	食料・物資配布、健康相談、生保申請相談
第19回	1月26日	74名	食料・物資配布、健康相談、生保申請相談、検診結果配布フォローアップの打ち合わせ

- ①食料・物資配布・・・おにぎり 豚汁 風呂券 その他(缶詰・タオル・衣類などの生活物資)
- ②健康相談・・・簡単な健康診断 医師による健康相談など
- ③生保申請相談・・・生活保護をもらって居宅生活に移りたい人たちへの説明と同伴の相談
- ④その他・・・回毎の特別企画(第16,17,19回)

はじめに、食料配布についてですが、これは昨年度同様、南区にある養護老人ホーム「静山荘」のご理解とご協力を得て、温かい食べ物を毎回提供することができました。物資配布については、「風呂券」の希望が最も多いのですが、予算上、当面1人2枚が限界となっ

ています。健康相談については、現在手伝ってくださる医師の数が少ないという問題のほか、検査をしたその後の問題、例えば、入院の必要性はないものの、治療が必要とされる人たちにどのようなことができるのかなどについて検討していかなくてはなりません。生活保護申請相談およびその他生活相談は、学生など支援する人たちのあいだで経験や知識の差があることや、参加される当事者の数に対して、私たち支援側の数のほうが断然少なく、ニーズに応えられていない点で、今後改善していかなくてはならない反省点です。また今年度は、これら企画のマンネリ化を防ぐため、新企画が考え出されました。普段、厳しい生活を強いられている当事者の人たちに、少しでも楽しんでもらえるようにと、奇術研による手品披露(5月企画)がなされたり、生活保護への正しい知識理解のため、パンフレットを作成して「生活保護説明会」(7月企画)を行い、当事者からの質問などを受けるとして、いずれの企画も好評でした。最後に、会員や協力してくださった団体に、企画の結果報告を実施するようにし、当日、企画に参加できなかった会員への責務も果たせるようになりました。

このように、まだまだ細かい点でみると反省すべき点が残っている内容もあります。しかしながら、これまでになかった新たな企画を考案し、常時80名以上の当事者が参加されるなか、大きなトラブルもなく、この1年間「生活・健康相談会」を続けられたということが、今、振り返ってみて一番の成果だったと思います。

#### 今後の展望と課題

これまでみてきたように、「生活・健康相談会」は単なる「炊き出し」以外にもいくつかの役割をもっています。そして今後は、この「生活・健康相談会」の限界を認識し、さらに発展していくためにはどうしていくべきなのか検討していく必要があります。例えば、自分の荷物の都合上、市民会館へ出かけられない当事者がいること、また、これら企画の日時等を当事者に知らせる方法がピラ配りによるものであるため、ピラを手渡されることも、仲間からの情報もない当事者は、企画の存在自体を知ることができない点などをあげることができます。これらの課題は、定例支援企画が今の形のままあり続ける以上解決されないと考えられます。また、昨年総会での懸案事項であった「他の団体との連携」についても考えていかなくてはなりません。「生活・健康相談会」のような多くの当事者を相手にする場合、当会だけでなく、静山荘のように協力してくれる諸団体が必要不可欠です。今年度は、新たに民医連の協力も得られましたが、今後さらなる発展を続けていくためには、互いの長所を有効に活用しながら、足りない点を補いながら協力していくという関係がつかれるよう、連携体制をより一層充実したものに確立していくことが大切になっていくと思います。

### 3. 北海道民医連との協力

#### (1) 年越し健康祭り

年越し健康祭りは、今年度 12 月 21 日に札幌市民会館にて行われた、路上生活者のための無料一斉健康診断のことで、この健診会は、普段健診を受ける機会のない当事者の方に自分の体についてよく知ってもらうことと、病気の早期発見とその予防、また医療機関の方々と当事者との交流を目的に実施しました。健診の内容としては、一般の会社員向け程度のもを想定し、尿検査、血圧測定、採血、心電図、胸部 X 線、C 型肝炎、問診、歯科検診を行いました。血圧測定、尿検査、問診といった簡単な健康相談は定例支援企画にて常に行ってききましたが、今回のような本格的な健診は北海道民医連の協力を得て実現したもので、当会としては初の試みだったといえます。

今回の企画のための協力体制としては、健診を民医連にお願いし、当会は普段の炊き出しをベースにプログラムを組み立て、当事者への事前の宣伝や物資配布、お楽しみ企画などを担当しました。

当日は、57 名の当事者の方が会場まで足を運んでくださり、そのうち健診を受けられた方は 46 名でした。当会内部ではこの企画は概ね好評であり、参加された民医連のスタッフの方々も興味を示され、反省会では「(当事者の方には) もっと診断・診察の必要性があると感じた」、「いろんな背景をもたれた方が多くいるので、継続した関わりが必要」という声も聞かれました。

また、前記のように 1 月 26 日には、健診結果を配布し、結果に異常が見られた場合の対策を練るためのフォローアップ企画を実施しました。ここでは、受診された方一人ずつ医師からコメントを頂いて、要精密検査、要治療という結果が出た方は病院に行ってもう一度検査を受けてもらい、治療のために生活保護申請をするためのフォローアップの備え(同伴者との待ち合わせ時間・場所を決めるなど)をしました。この日結果を受け取りに来られた方は、受診者 46 名のうち 29 名で、このうち 1 名の方が同日緊急入院、何らかの異常が見られた方のうち 11 名の方を、翌日 27 日(月)~2 月中旬までの間に会としてサポートしました(結果については表 A 参照)。

この企画は、本格的な無料健康診断という企画の新しさのみならず、外部機関と協力して当事者の方をサポートできたことは労福会の活動のあり方として大変意味のあるものでした。ただ、反省点としては、はじめての試みということもあって、当事者の方への事前の説明が不十分であったため一部の方には「健診を強要されている」といった印象を与えてしまったことが挙げられます。私たちからみて、「よい」と思っていることでも当事者の方には苦痛となることがあります。こうした大きな企画を今後も継続して行っていくためには、当事者のニーズをよく知り、それに適切な支援が可能となるように、当事者との継続的な関わり維持と、その中での話をよく聞くという基本的なことを準備の段階から心がけていかななくてはなりません。

(2) 健康祭りのフォローアップについて

1月26日に、健診結果を配布するための炊き出しを行い、翌27日から2月中旬にかけて、結果に異常が見られた方と役所に行き検診命令を出してもらった後、病院に同伴するというフォローアップを行いました（結果については下記の表A参照）。即入院となる方もいらっしゃる一方で、何度も精密検査を繰り返した後に「異常なし」あるいは「入院には至らないが通院の必要あり」と言われて、保証人なしでも契約可能なアパートを探した後に、居宅保護となり生活保護を受けて通院されている方など様々なケースがありました。会としては、ほぼ1ヶ月半に渡り、粘り強くフォローを行いました。

表-A 健康祭りフォローアップ結果 (3月12日現在)

ケース番号	性別	担当者	検査を受けた病院	検査結果	その後
1	男	上西、諏訪、人見	斗南病院	高血圧、糖尿病	入院、
2	男	南部	勤医協中央病院	腹水	不明
3	男	眞鍋	北大病院	高血圧	居宅保護、通院
4	男	山内	北大病院	陳旧心筋梗塞	入院
5	男	藤堂、山田	社会保険総合病院	異常なし	保留
6	男	塩崎	勤医協中央病院	肺疾患、気管支炎	入院
7	男	眞鍋	北大病院	高血圧	居宅保護、通院
8	男	椎名(結)、山田、眞鍋	北大病院	肝臓疾患	勤医協中央に入院
9	男	塩崎	勤医協中央病院	膝疾患	入院
10	男	眞鍋、坪田	北大病院	ききょう	居宅保護、通院
11	男	眞鍋	北大病院	肺疾患	居宅保護、通院

## 4. 生活保護申請同伴結果のまとめと課題

### 1. 今年度の生活保護申請同伴についての会の方針

当会は、昨年度に引き続き路上生活者の自立支援活動の中心として生活保護申請同伴を積極的に行ってきました。生活保護の申請については、会として昨年度から熱心に同伴を行ってきたものの、住所不定、扶養義務の存在などの理由により窓口で相談が行われないこと、また、生活保護の受給が決定し居宅生活に移った後に中々生活を立て直すことができずに再び路上生活に戻ってしまうという問題が見えてきたことによって、昨年度と同じように同伴を続けていくべきかどうかについて、年度始めから事務局内でも戸惑いが大きくなっていました。

そのため、前半期には2度にわたる学習会を開き、これまでの活動を整理し直して自立支援に向けての話し合いの時をもつなどしました。その結果、路上生活者のための自立支援センターといった施設が存在しない札幌市では、依然として生活保護制度の活用は「脱路上」のための最も有用な制度であることの確認がなされ、行政に対して適正な手続きに基づいて制度を運用することを強く要望するとともに、就労支援といった他の自立支援のあり方を探りつつ、当事者の意思をよく確認しながら「できる範囲」で同伴を行っていくという方向で支援していくことになりました。

### 2. 同伴結果のまとめ

今年度は学生のスタッフが諸般の事情により中々同伴に行くことができない中、市民の方々が参加され、窓口での相談からアパート探しまで大変健闘されました。その結果年越し健康祭りのフォローを含め、この一年間に会を通じて生活保護の申請に至った方は同伴した47件のうち31名（表2参照）になります。このうち去年度からの関わりのあることが明らかな方が、6名います。このケースは、生活保護を切られそうになった際に労福会のスタッフが再申請のお手伝いをしたという場合と、再び路上生活に戻ってしまったが会の支援の下にもう一度生活保護を申請された場合の2通りあります。

したがって、今年度生活保護申請同伴により新たに申請した方は実質的には25件となり、去年度の22件と大体同じくらいの申請ができたといえるでしょう。内容としては、同伴に向う会のスタッフも生活保護についての理解を深め、またなによりも当事者との信頼関係を築くことに関してきたことや、保証人や前金なしでアパートの契約をして下さる大家さんの協力などを得て、路上から一旦アパートに入居する（居宅保護）ことが可能となったことが生活保護の申請をする上で大きな助けとなっています。

また、申請に至った方々は全て生活保護の受給が決定したと予想されますが、その後の消息について当事者の方との連絡が中々とれず半数以上が明らかではありません。これは当会が、活動能力の許す範囲として「脱路上」のための「つなぎ」としての役割を果たすことを中心に活動しているため、脱路上後のことまで中々手が回らないことがその後の関係を維持することを困難にしています。

表-1 2002年度 生活保護申請同伴結果① (3月12日現在)

ケース番号	性別	担当者	結果1	結果2	消息
1	男	坪田	検診		
2	男	南部	相談	救護入所	居宅へ
3	男	塩	相談		
4	男	小西	相談	救護入所	居宅へ
5	男*	諏訪	相談	救護入所	失踪
6	男	小西、眞鍋	相談		
7	男	諏訪、眞鍋	相談	救護入所	
8	男*	坪田	検診		
9	女	山内	検診		
10	男	山内	相談	居宅保護	
11	男	山内	相談	居宅保護	
12	男	山下、佐々木、諏訪	検診	救護入所	
13	男	諏訪	相談	居宅保護	
14	男*	南部	相談		家族の元へ帰る
15	男	上西、安部	相談	居宅保護	
16	男	眞鍋	相談	救護入所	
17	男	〃	相談	相談	
18	男	〃(お見舞い)	緊急入院		年金受給しつつ路上
19	男	〃			路上、週2回仕事
20	男	〃(仕事紹介)			失踪
21	男*	〃	相談	再申請	申請受理
22	男	〃	相談	居宅保護	
23	男	〃	検診	入院	救護経由で生保受給
24	男	〃	相談	居宅保護	
25	男	小西			そしある企画の職員になる
26	男	眞鍋			家族の元へ、社会復帰
27	男	〃			〃
28	男*	〃	相談	再申請	申請受理、通院リハビリ中
29	男	〃	緊急入院	居宅保護	通院中
30	男	〃	相談	救護入所	救護に留まる
31	男	〃	緊急入院	居宅保護	通院中
32	男	〃	相談	居宅保護	
33	男	塩崎、諏訪	相談	特養入所	居宅へ
34	男	塩崎	相談	救護入所	居宅へ
35	男	南部	相談	救護入所	居宅へ
36	男	眞鍋	緊急入院		

※\*は昨年度も会が同伴した人です。

表-2 生活保護申請同伴結果② (3月12日現在)

	同伴総数	男性	女性	検診命令	入院	居宅保護	救護入所	申請総数	その他
炊き出し等	36	35	1	5	5	9	10	22	5
健康祭り	11	11	0	11	5	4	0	9	2
合計	47	46	1	16	10	13	10	31	7

### 3. 今年度の反省と課題

生活保護制度に関する今年度の反省点としては、会のごく一部の人々に同伴が集中してしまい、会全体での取り組みというよりは個人的な活動になってしまったことが挙げられます。これは、個人の負担が大きい上に、生活保護に関する知識・同伴経験に関して情報の共有を不十分にしています。確かに、当事者と接触を持つことについての見解や支援できる範囲は個々人で異なるところではありますが、路上生活者自立支援の大きな柱となっている生活保護制度の利用に関しては、その問題の大きさゆえに会全体で十分に議論しつつ慎重に行っていくべきだといえます。

前半期は2回の学習会を開き、同伴にまつわる体験談などを分かち合う機会を持つことができましたが、後期はそうした話合いの機会をもつことがまったくできずに終わってしまいました。来年度も今年度と同じくらいのペースで同伴活動をしていくのであれば、形式はどうあれ、生活保護に関する話合いのときを定期的に設け、皆で取り組むという体制を作っていくことが必要になると考えられます。

さらに「脱路上」という文脈の中だけで生活保護の利用を位置づけることは、当事者の自立支援に関して閉塞感をもたらしています。というのは、以前から指摘されてきたことではありますが、居宅生活に移った後に社会復帰していくことの難しさが前年度に比べより一層明白になってきているからです。アルコール依存症や健康問題はもちろん、自殺、再野宿といった問題が見えてきているのです。会の中には当事者との個人的なつながりの中で、居宅生活後も継続して手紙を出したり訪問したりして精神面でのサポートを実践しているスタッフもいますが、このような取り組みを会の活動として取り組んでいくことが今後の課題です。

## 5. 行政との関わり

労福会は当初から健康生活相談会や夜まわりなどの支援活動を行いながら、一方で路上生活者問題解決に向けた施策の検討を行政（札幌市）に訴え続けてきました。一昨年度には札幌市長に対して「札幌市における路上生活者が抱える問題の解決に向けてのお願い」という要望書を提出し、住居、健康、就労の三つの問題について市としての対応を求めました。しかし当時はいずれも具体的な対応は考えていないという返答で、私たちとしては不満の残る結果となりました。ただし今後札幌市と労福会の両者がパートナーシップを高めながら連携していく、というところではお互いの理解を得ることができ、どういった関係を築いていけば良いのかを模索していくこととなりました。昨年度もこの延長線上に立って市と札幌路上生活者の現状について懇談会を設けるなどしていましたが、今年度は「ホームレスの自立支援等に関する特別措置法（通称：自立支援法）」が7月に成立するなど、路上生活者問題をめぐる社会的な状況が徐々に変わりつつある時期であったこともあり、会と行政機関との関係はより具体的なものになったと言えます。以下に他の報告と重なる部分もありますが、今年度の行政との関わりについて報告します。

### (1) 「自立支援法」の成立をめぐって

「自立支援法」の成立を受けて、札幌ではどのような対応が考えられるのかについて意見交換を9月12日（木）に北大教育学部で行いました。札幌市では、現時点で自立支援法によって特に新しいことが始まるわけではなく従来どおり生活保護によって対応していくということだったので、労福会としては生活保護同伴活動の際に見られる住居要件に関して救護施設をもっと広く利用できないかということ、あるいは民間アパートを札幌市や労福会が借りるなどして、そこを救護施設と同じような扱いで利用することはできないかということについて議論をしました。しかし札幌市は、生活保護を利用するという場合については本人の自立の意思や能力の活用の問題が第一だという見解の一点ばりで、結局これらの点の具体的な回答を得ることはできず、「自立支援法」の成立も今の札幌にはほとんど影響のないことが明らかになりました。ただし、札幌市としても今後は「自立支援法」によって他の部署や機関と協力して何らかの施策が行なえる場合は当然行なっていくと述べて「自立支援法」がこれから先も全く影響がないわけではないという点は強調していました。また、市の行う調査だけでは把握できない路上生活者の存在を市自身も認めていること、そういった人たちの状況を知るには労福会の活動が重要だという見解が示されたことから今後お互いの連携を強化していくことを確認しました。

### (2) 「すすきの検診」での協力

「日頃住民健康診断の受ける機会のない15歳以上の市民」を対象にした「すすきの検診」というのが年1回行われています。これは検診車を使って街頭で胸部レントゲン検査

を行い、結核の予防、発見を促すために札幌市保健所と結核予防協会北海道支部の共催で行っているものです。この「すすきの検診」が9月24日と27日に行われて路上生活者も対象として実施できるという情報を労福会の会員であり医師でもある小橋先生と札幌市の結核・感染症担当課長から連絡してもらうことができたので、その利用に向けて労福会でも取り組むことになりましたが、具体的にはピラを作成し告知のために配布をすること、そして検査結果の通知を労福会が本人に渡す方法をとることになりました。結果から言えば、受診された路上生活者10名全員が結核の疑いはなかったということで皆さん安心しておられたようでした。「すすきの検診」は路上生活者への取り組みとして実施されているわけはありませんが、健康問題について彼らに対しても門戸を開いている札幌市の事業は他になく、その意味で非常に重要な意味を持ちます。今後「すすきの検診」を皮切りに路上生活者に対しても開かれた事業を札幌市がつくっていくことが望まれます。

## (2)「年越し健康祭り」の実施に向けて

先ほど報告にあった「年越し健康祭り」の実施のためには、実は行政との連携が非常に重要なポイントとなっています。「年越し健康祭り」実現に向けて労福会、民医連、札幌市の三者で11月8日(金)に札幌市保護課で行われた懇談を皮切りに数回にわたる話し合いの場が持たれました。争点となったのは「年越し健康祭り」を行なうにあたって札幌市としての協力を得ることができるとかという点でしたが、これについては市が実施している「すこやか検診」として位置付けることでその可能性を探りました。粘り強い話し合いの結果、市はとて前向きな姿勢を示して「札幌市が主催して、ホームレスを対象とした「すこやか検診」を実施するものではなく、あくまでもボランティア活動団体がホームレスに限って実施する健康検査を本市の「すこやか検診」としての費用請求を認めるものとする。」という条件で「年越し健康祭り」は12月21日に実現可能となりました。つまりこのことは「年越し健康祭り」それ自体が非常に有意義であっただけでなく、行政とのかかわり方という側面からみても、札幌市が民間団体と連携して路上生活者支援に初めて具体的な動きを見せたという意味で非常に重要であり、今後の行政との関わりを考えていく上で大きな第一歩となったと位置付けることができます。

## (3)「ホームレスの実態に関する全国調査」の委託

「自立支援法」の成立から、国(厚生労働省)は路上生活者の自立の支援等に関する施策の策定にむけた基礎資料として、全国規模での実態調査を行うことになっていました。具体的には路上生活者数をカウントする概数調査と個別面接による聞き取り調査の二つですが、これらはすでに労福会でも独自に行なっている調査とほぼ同じものです。したがって会には調査実施のためのノウハウがすでに蓄積されていました。そのため、この全国調査について札幌市から調査の依頼を受けることになり、札幌市に代わって全国調査を実施しました。調査は概数調査が2003年1月25日早朝4:30～10:00に、聞き取り調査が1月

26日～2月9日の期間に行なわれました。調査結果については依託調査のため独自に公表することはできませんが、いずれにしても行政から事業の依託をされるということは、行政にとって労福会の存在が大きなものとなっていることの表れであるといえます。このことは「年越し健康祭り」と同様に行政とのパートナーシップをより確かに実感することになりました。

以上、今年度の行政との関わりを振り返って見ましたが、最初に述べたように今年度の労福会の特徴として行政機関との関係がより具体的な形で発展してきたということを挙げるができます。これは労福会がささやかながらも路上生活者支援に向けた活動を継続的に行ってきたことが大きな要因であり、労福会が社会的に認知されてきていることを示すものです。ただ、このこと自体は評価されて良いと思いますが、一方で実は一昨年札幌市長に提出した要望書がようやく実現され始めているに過ぎないと言うこともできます。今後もお互いに良好なパートナーシップをとっていくことが望まれますが、例えば生活保護の運用をめぐる意見の相違など、まだまだ詰めるべき議論は山積みです。これからも協力できるところは協力しつつ、かといって妥協することなく行政機関との関わりを続けていくべきなのは言うまでもありません。

## 6. 2002 年度会計報告

### 今年度の会計報告

・ 前回からの繰り越し		969,269-	
・ 収支			前年度比
収入	会費	16,5000-	(-10,000)
	カンパ	186,015-	(-24,665)
	共同募金	725,000-	(+25,000)
	利息	28-	(-122)
	小計	1,076,043-	(-9,787)
支出	生活健康相談会	625,799-	(+45,645)
	生活保護申請同伴	140,516-	(-3,873)
	夜回り	51,966-	(+13,109)
	広報	34,110-	(-11,401)
	通信	73,525-	(+5,767)
	2001 年総会	12,161-	(-60,678)
	事務用品	2,796-	(-6,472)
	人数確認調査	2,400-	(-32,625)
	その他	2,230-	(-13,770)
	小計	945,503-	(-64,298)

\*注 2003年1月に市からの委託を受けた人数確認調査に関する収支は現時点では未清算です。来年度の報告に持ち越しますことをご詫び申し上げます。

・ 次回への繰り越し 1,099,809-

以上、2002 年度の会計を報告いたします。

2003 年 3 月 15 日

代表 権名恒  
 事務局長 諏訪絢子  
 会計 藤堂美紗子

・ 2002 年度会員  
 賛助 4 件 / 一般 16 名 / 学生 15 名

・現時点での来年度への見通し

1. 夜回り、生保申請、炊き出しは同程度の出費と思われる
2. 連絡先の分割により通信費が1.5~2倍に増加
3. 会報の発行強化により広報費が若干増加見込み
4. 2003年1月の人数確認調査分の賃金収入は¥100,000~200,000の見込み
5. 収入の7割を占める共同募金会からの支援金が半減する
6. キャンパ・会費収入増加の努力、歳末助け合い助成金への応募

・名簿の管理・報告書の送付

振替口座を作ったことで寄付金の明細が明らかになり、名簿登録やお礼状の送付が確実に行うことができました。今年度から始めた健康生活相談会へのお手伝い案内状や報告書送付の取り組みにより、多くの市民の方に活動への参加・周知がなされたと思います。しかし健康祭り、フォローアップ企画の報告書の送付は出来ませんでした。来年度は簡単な案内状についてはメールを使って配信していきたいと思っています。

今年度も本会の活動に協力し、寄付金や衣類・生活用品を寄付して下さった皆様から心からお礼を申し上げます。皆様からの寄付は路上で生活する方たちの支援に使わせて頂いております。来年度も宜しくお願い致します。また、寄付に対する質問・意見等がございましたら事務局にご連絡ください。皆様の声を伺うことでよりよい会にしていきたいと思っています。

## 7. 広報活動における今年度の活動報告と課題

ここでは、今年度の会の広報活動についてまとめ、来年度の取り組み方を考える事にします。外部への広報活動には主に会報『ともに生きる』の発行とホームページ（HP）の運営があります。また内部向けの連絡手段としては、メーリングリスト（ML）があります。

### 1. 今年度の広報活動について

#### 1) 会報

- ・当初の予定では、会報は季刊誌として発行する事になっていました。しかし、今年度は第6号が8月に発行できただけでした。このため、今年度の活動については、夏までのものしかお知らせできず、会員に対しての情報提供が十分ではありませんでした。
- ・同時に会報は、会の活動を外部に知らせるために活用されています。定期的に会報が発行できなかったために、活動の内容やその変化を伝える事が出来ませんでした。

#### 2) ホームページ（HP）とメーリングリスト（ML）

- ・会では広報活動の一環として、HP (<http://members.tripod.co.jp/roufuku/index.html>) を開設しています。HPでは会の規約や会報のバックナンバー、メーリングリスト（ML）についての説明、掲示板や問い合わせ先などが掲載されています。3月1日現在で約

4700回のアクセス数があります。

- ・HPは、非会員向けの情報提供を担うと共に、事務局会議や健康相談会などの企画情報といった、速報性の高いものを掲載しています。ただし、更新が会議の直前になることもあり、適切な時期に更新できなかった事もありました。またHPの掲示板では、外部からの質問や情報提供等を受け付けています。HPを介した会へのアクセスは増加しており、来年度以降は更新を活発に行こうと思います。
- ・会では事務局の連絡用として、MLを運用しています。MLでは内部向けに事務局会議の内容や企画の打ち合わせなどの連絡を主に行っています。しかし、MLに加入している人の数が多くなり、誰にどのような情報が行き届いているのかについて、十分に把握できていません。そのため、一部では会議や支援企画の日程が通知できておらず、活動に関わり難くなっているのではないかという指摘があります。

## 2.来年度の広報活動について

### 1) 広報担当者の設置と会報の季刊化の達成

- ・会報の発行が少なかった理由には、まず年間を通して担当者を配置できなかった事にあります。来年度は担当者を配置すると共に、発行時期に関する年間プランを立てる事で、定期的な発行を行います。支援企画や人数把握調査などを考慮して、5月/8月/11月/2月頃を目途にしています。
- ・物資や寄付金を提供して下さる方々に対しても、会の活動内容を伝える手段として、会報を活用していきます。頂いた物資や寄付金の使われ方を明確にする事で、継続的に会に関わって頂けるような関係を築けるようにします。

### 2) HPによる情報提供の充実とMLの活用法

- ・来年度は事務局会議の日程などの更新を速め、掲示板の質問などにも早急に対応できるようにします。また事務局会議の内容などをMLと同様に開示し、会の活動についてより広く知ってもらえるようにします。
- ・MLは、参加者への連絡網として機能している面があります。一方で、参加し始めたばかりで、MLに入っていない人への連絡に不備が生じるという問題がありました。そうした参加者へ連絡手段として別のMLを作るのかどうかも踏まえ、議論が必要になっています。この点については第2部で改めて考える事にしています。

今年度の会の広報については、当初から取りまとめる担当者を設置できなかった事が問題でした。来年度は担当者の元、これまで十分提供できなかった活動内容についても、積極的にお知らせできるようにしていきます。

## 8. 来年度の課題と方針

文責 安部薫道

来年度の基本方針として、従来通り炊き出しや夜回り等の活動といった脱路上支援を行います。またそれに加えて「居宅生活支援」も行おうと考えています。それでは以下で来年度の具体的な課題とそれに対する方策を明らかにしたいと思います。

まず一つの課題は、炊き出しや夜回りなどに取り組むモチベーションをいかに向上していくかという事です。この原因としては、何のためにこれらの活動をするのかがあやふやになり、あまり深く考えずに動いていた等が考えられますが、これについて来年度は原点に立ち返って話し合える場を持つようにしたいです。すなわち何か行動する前に最終的な目標と今どこにいるのかを確認することによってモチベーションを上げて、一人一人が充実感をもって活動できればと思います。

次に活動の範囲をどこまでにするかということが課題として挙げられます。というのは今年度は炊き出しを多く行ったり、外部と連絡を密に取ったりと、意欲的に活動しました。それに伴ってどうしても特定の人に負担が集中してしまったからです。そこで来年度はやれる範囲でやるという徹底したいと思います。

上で外部という言葉が出ましたが、来年度もできる限り他の団体と協力関係を維持していきたいと思います。ところで行政との関係についてですが、理想ではありますが常に話し合えるような関係をもてればと思います。今年度は保護課との懇談や札幌市からの調査委託など会が認められてきたといえる実績がありますので、それを来年度につなげていきたいと思います。また市民へのアピールについてですが、活動への勧誘のみでなく、関心をもってもらうための広報をできればと思っています。

さらに「居宅生活支援」への取り組みですが、これはどういうことかということ、つまり生活保護を受給するなどして居宅生活を始めたものの、健康問題や高齢による就労の困難さ、孤独、深酒、賭博など様々な理由で社会的自立ができず、再び路上生活に戻るのを防ぐというものです。この具体的対策として、来年度は調査を行い、関係をもち続けたいと思います。あくまで理想ですが、路上生活者が一人残らず居宅に移って、そこで労福会が自立支援をするという考えがあってもいいのではないのでしょうか。

最後に初めて参加して下さる方にとって関わりやすい会にするためにどうするかというのが課題であると思います。というのは初めて参加した方が事務局会議に出席しても、専門的すぎて話がさっぱり分からず、わけの分からないまま生活保護申請同伴を行ったのでは次から参加する気がなくなってしまうと思うからです。そこでこのような状況を防ぐために学習会を開き、具体的な事例を挙げて分かりやすく知識の共有ができればと思います。なお、知識の共有ができれば足りるのですから学習会というスタイルにこだわらず、毎回の事務局会議に10分間ほど体験を語る時間を作ってもよいと考えています。

以上が来年度の方針です。実際どこまでできるかは分かりませんが、出来る限り、楽しんで活動に取り組みたいと思います。

## 8'. 会の運営に関する課題

### 1. 今年度の反省をめぐる課題

今年度は会の活動も3年目に入り、会設立当初から地道行ってきた炊き出し・調査に加えて、年越し健康祭りの実施に見られるように、活動自体の拡大、質の向上は申し分なく行われてきた一年でありました。しかしながら、このことは必ずしも組織として発展していることを意味するものではありません。というのは、2000年度の総会以来指摘されていることですが、特定の人物に仕事が集中することや、会の活動に事務局レベルで関わってくれる人の少なさが指摘されつづけ、それは今年度も改善の日の目を見ることなく終わってしまったからです。

今年度特有の問題点としては、活動の中心を担う事務局の結束が弱くなってきていることが挙げられると思います。活動の拡大に伴い多くの市民の方々が会に深く関わってくださるようになり、事務局に訪れるメンバーも多様です。こうした多様性を活かしていくためにはお互いの信頼関係を築いていくことと、具体的には何か企画を行う際に「みんなで決めたことはみんなで責任をもって行う」ということが重要になります。

路上生活自立支援に会として精一杯取り組むこと、また、そのため今後さらに活発になることが予想される外部機関及び一般市民の方々と活動を広げていくにあたって、当会が内部での十分な協力体制を整えるという意味での「組織の発展」は必至であるといえるでしょう。

### 2. よりよい組織運営を目指して

#### ① 複数代表制と運営委員会の設立

今年度は、活動が一般の方々に広く知られるようになり、北海道民医連やそしある企画など外部機関と協力する場面がいくつかありました。そこでこれら外部との交渉を円滑に行っていくために、代表を3～4名に増やして（現在は2名）外部機関からの窓口を広げ、外部機関と共同で企画行う場合に、そうした代表クラスから成る運営委員会に渉外を担ってもらおうという案が出ています。

また、一方で、現体制を維持しつつ、事務局内の役割分担として、事務局長を中心に、副事務局長、会計、広報といった諸係りの任期を一年間と定め取り組んでもらおうという意見も出ています。

#### ② 人材の確保・育成について

会のHP、新聞などのマスコミを通じて、炊き出しに参加して下さる市民の方々は沢山いらっしゃいますが、その後中々活動に深く関われないという問題があり

ます。これは一人一人のスタンスによる場合もありますが、一度でも顔を出してくれた方へのフォローを含めた連絡体制が整っていないためでもあります。これについては、初めてに参加された方に対して興味関心を探ってもらうための学習会を行ってはどうかという案が出ています。また、一般的には知られているのですが、学内での宣伝（※）を殆ど行ってこなかったために、会の存在が学生に今一つ知られていないということも問題となっております。今後炊き出しの度に学内に掲示をするなど積極的なアピールが必要となります。

※ 学内においては、今年2月北大に受験しにきた学生に労福会を知らせるためのびらを7000枚配布しました。

## 9. わたしと労福会

昨年度の総会に引続き、今年度の会の活動に関わった方々の中で、活動に参加して考えたことや、会に対する批判・意見などをできるだけ多くの人に自由に書いてもらいました。普段中々会議に出席できない方や炊き出しに1回だけしか参加できなかった方など、色々な方がいますが、この一年の労福会について思いの丈をぶつけてもらいました。

椎名 結実 北海道大学法学部2年

小学校の頃近所の公園にホームレスが住み着き、学校で気を付けるようにと言われてから、私はどちらかというところそういう人たちを見掛けても見ないふりをして歩いてきました。でもずっと気になってました。ジロジロ見たら悪いのか、無視して通ったら傷付くのか。話しかける勇気ありません。労福会に入ろうと思ったのは、路上を脱して独り暮らしをしていた人が自殺したということを知ったからです。寒く食べ物も充分にない、そんな中で暮らしてきた人がその状態を脱しても幸せになれるわけじゃない、じゃあ何が幸せなんだろう。この世の中で、どうしたら幸せに生きられるんだろう。とてもショックでした。漠然と、自分に無関係なことじゃないんだと思いました。

入ってから二度の企画と調査でホームレスの人たちと接しました。普段どうしたらよいか分からず無視していた人たちに笑いかけ、向こうも話しかけてくれることがとても嬉しく、楽しかったです。私は人を無視しながら生きてゆくのがずっと嫌だったのかもしれないと思いました。

これから、何が自分も含めてよりたくさんの人の幸せにつながるのか、労福会の活動をしながら考えていきたいなと思っています。

佐々木 宏 北海道大学教育学部助手

今年は活動が急速に広がった年でした。昨年中の「ホームレスに関する特別措置法」の成立が、一番の追い風になったのだと僕は思っています。が、市を巻き込んだ健康診断会を開催したことや厚労省の全国調査を無事遂行したことなどは、事務局の皆さんの力量と努力の賜物であることは間違いありません。その段取りの最中に、またもや札幌を長期離れた僕は遠くから諏訪事務局の仕事ぶりを、ただただ感嘆しつつ眺めているだけでした。昨年書いたことですが、まったく…、代表・副代表などというものは「案山子」みたいなものだなあというのが正直な感想です。本当にみなさんお疲れ様でした。とはいえ、来年に向けて少し課題めいたことも書いておくと…

今年も事務局の皆さんの努力によって有力な新スタッフ、貴重な物資・資金などを得ることができましたが、来年の新体制をイメージする際には十分なものでなかったことは、総会までの議論で共有されたことでした。これは、活動が広がるボランティアな団体が直面する問題でしょうから、来年も同様、いい活動をしたいという気持ちと「財布」の中身のギャップに悩むことになるかと思います。この点について、心配半分、楽観半分というのが、僕の率直な見通しです。

楽観しているというのは、ここ3年半の活動の中で労福会が取り組んできたこと、そしてこれから進もうとしている方向性、いずれにしても自信をもってよい水準にあると思っ

ているから。もちろん、課題はたくさんあるので、「より良い活動」を目指す姿勢があるという意味で自信をもってよいのではということですが、「良い活動」を続ける限り、資金やスタッフ集めはテクニカルな課題にすぎないでしょう。仮に、資源が足りなければ、確信的に活動を一旦小さくすればいい、つまり「無い袖はふれない」でいいと思っています。

反面、少し心配していることは、労福会がやっていること、これから目指すことについてスタッフの中で共通にイメージを持っているのか？ということについてです。活動が拡大するなかで、常に不足気味の資源を使って何をするのかを考える時に、大事な点はさしあたって活動のどこにプライオリティをおくのかということですが、「何をを目指すのか」がはっきりしていないとこの判断は難しい。総会に向けての会議では、「自立支援とは？」といった活動の根幹に関わる点についての議論がおこなわれたと聞いていますが、今年は広がる活動に追われてそれが十分にできなかった(諏訪事務局長がこの点について自覚的であったことはよく知っていますが)ように思います。会報を出す機会が少なかったことも、活動の自己評価のチャンスを失った要因かもしれません。

自分たちが「何のために」「何をしようとするのか？」をはっきりさせるということは、資源集めのキイになります。寄付者や支援者への説明責任とは、多分、この議論の結果を示すこと以外にはありえないとも思う。尤も、活動への確信が盲信や妄信であってはならないわけで、あくまでも外部へ説得力を持ちうる自覚である必要はありますが、未来志向の活動評価は来年度の活動にスタッフの一人として期待する点です。来年も、「ともに(悩み考えつつ)生きる」ことのできますよう。

#### 安部薫道 北海道大学法学部2年

非常に個人的で恐縮ではありますが、なぜ僕が会に参加するかについて書きます。というのは実はほかに書くことが思いつかなかったからでありまして…しかし僕にとってメンバーの皆さんが会に参加する動機というのはなかなか興味のあるテーマで、機会があれば一人一人詳しく聞いてみたいと思っているのも事実です。

さて、僕が会に関わる動機は何かと考えたときに、正直言ってはっきりしたものを挙げるのができません。しかしこれはメンバーの多くの方についていえることではないかと僕は勝手に思っています。すなわち人のために何かをするんだ、といった強いボランティア意識をもって参加しているというよりはただなんとなく参加している方のほうが多いのではないかと思うのです。

僕の場合あえて動機を挙げるとしたら以下のようなものがあります。まずひとつは社会を知ることです。普段ぬくぬくと大学の中で生活していると、ホームレスのような深刻な社会問題に肌で触れるような機会はあまりありません。だから労福会に参加することによって社会勉強ができるというわけです。それからただ単に好奇心から会に参加している面もあるように思います。さらに実は僕はあまりホームレスを見たくないというものだと思います。好きとか嫌いではなくて駅や公園で、できればホームレスを見かけたくないと思うのです。もし労福会を、極端ではありますが、ホームレスをなくしていく会と捉えるならばこういった感情を動機とみなすことができると思います。それから最後に居心地がいいから会に参加しているという一面もあると思います。僕にとって先輩たちは大きな魅力です。

以上のように思いつく動機を挙げてみましたが、やはり動機不順に変わりはないと思います。しかし、動機がはっきりしていなくても会に参加できるし、また動機不明なメンバーが不思議な結びつきで会を作っているというのも労福会の魅力であると思います。

#### 中明 結花 北海道大学医学部5年

私が労福会の活動に参加したのは今年の2月からです。きっかけは知人があるML上で会の活動を紹介していたことでした。

私はここ札幌に生まれ育っていますが、この寒い地で約百人もの人が路上生活をしているという事実を知り初めは驚きました。実際、街を歩いていてもその姿を見かけることはなかったような気がします。しかし会に参加し、ピラ配りや夜回りをするようになって思ったことは、これまでは単に気付いていなかったただけだったのだということでした。目には入っているものの気に留めなかった、つまり正直なところ関心がなかったのだと思います。

初めて参加したのは炊き出しのお知らせのためのピラ配りの時でした。朝4時半に集合し、寝ている人達の脇にそっと置いていきました。2月の朝4時なんて一体誰が外で寝ているのだろう、と思いながら歩いていたのを覚えています。

結局、あの早朝の寒さが今でも私が会の活動に参加する理由のような気がします。知ってしまった以上、見過ごせないレベルの問題であると思うのです。理由は特にありません。

会議ではたびたび自分達の活動に対する疑問が話題にのぼります。その質は人によりさまざまですが、大体共通しているのは、自分達がしていることが本当に当事者の方の自立を手助けしていることになっているのか、といったことであると思います。私も時々そんなことを感じながら活動しています。例えば「これは本当にこの方が望むことなのか」「その人のためになることなのか」というようなことです。

こういった疑問を感じるものの、基本的には私はこの活動が大変大きな意味を持つと信じています。生活保護申請の付き添いなどの実用的な面は言うまでもなく、周囲の人間が行動を起こす、そのこと自体にも意味があると思うのです。少しずつ、ほんの少しずつですが、この現状を知らない人が減っていき、より多くの人に関心を持ってもらえる日がいつか来ることを信じて続けていくしかないと思っています。

最も望まれるのは、会の活動が必要なくなること、すなわち自発的ではない路上生活者がいなくなることであると思います。その時までにはどんなに存続の危機に陥ったとしても続いて行って欲しいと思います。

個人的な来年度の目標としては、当事者の方が一体何を求めているのか、どうあるのがその人にとって大切なことなのか、というようなことを少しでも気付くことができるようになることです。正直なところ、もう一歩踏み込めない自分がまだいます。「こんなことを聞いていいのかな」と思うってしまうのです。

来年度は個人的にますます忙しくなってしまうのですが、可能な限りは会議、そして夜回りに行きとにかく当事者の方の話を聞こうと思います。直接話をする、これがきっと一番の近道なのではないかと思うのです。

佐藤 学 北海道大学教育学部 4年

卒業論文作成を理由に、今年度の労福会への参加は実質的に休止していた。

この休止期間に僕が労福会に対して感じていたのは「解放感」が大きかった。これは単に事務的な仕事から解放されたという理由だけではない。労福会の活動に関わることで生じる矛盾を抱え込む必要がなかったからだ。

労福会の参加者であれば、路上生活者を「怠け者」とは捉えず、様々な社会的要因の「犠牲者」と見るだろう。だから、彼らが路上から抜け出て人間らしい生活を送れるよう支援するべきだと考える。

一方でこの考え方には賛成できる。特に、「もしも自分が…」と想像したときに労福会のような存在はひとつの希望だろう。だが、他方でいくつかの疑問も生じてくる。彼らを「犠牲者」として捉える根拠のひとつは、彼らが脱路上を望まないと答えても、それは一時期にいじけているか、あるいは長期的な路上生活が彼の考えを歪ませたというものだ。しかし、それはひとつの解釈であって同等の権利をもって彼らが路上生活を望んでいると考えることもできる。つまり、路上から居室に移ったとしても多くの場合、居室生活を営む上で多くの制約、守らなければならないタスクが生じる。そのタスクをこなしながら居室生活をするのか、それとも路上に残るのか。この選択を迫られたときに、果たしてどれだけの人間が本当に居室生活を望むのだろうか。

こうした考え方に対して批判や不満が出てくるのは承知の上だし僕自身も言い足りないことはたくさんある。だが、ここで僕が述べておきたいのは、労福会に関わることはそうした矛盾を抱え込まざるを得ないということだ。単純に自らの活動にもろ手を挙げて賛同するわけにはいかないはずだ。

こんなことを書かなくてはならないと思わせるほど、この会には影響力があった。考えてみれば厄介な存在である。困った、困った

中川 雅紀子 一般/アルバイト

昨年冬がそろそろ始まる頃、たまたま札幌駅に寄った私は、林檎を3つほど持っていました。毎年、試験場で収穫された林檎がわたしの職場にまでまわってきて安くわけてもらえるのです。幾つか職場で剥いてしまったので、3つほど持って帰るところでした。

JRの北口には、前から気になっていたのですが路上生活者の人たちが、掛布を頭までかぶって眠っていました。日没後の寒空からはばらばらと雨が降り出しており、やるせない気持ちになりました。自転車に乗りかけて、やっぱり止め、路上のひとのところへ戻りました。林檎はあまり喜ばれないかもしれないけど、好きなひともいるかもしれない。ちょうど、離れ離れに3人路上のひとがいたので、数もちょうどいい。よし、そうしよう。そう思って傍へ寄ってみたものの、寝息をたてて眠っている背中に声をかけるほどの勇気はでなくて、敷いてあるシートの端に置いてみました。他の2人のひとにも同様にして、帰りかけたときでした。真っ暗な中で声が出ました。「僕には？僕にはないの？」林檎なんて置いた自分を誰かが眺めてて冷やかしてるんだ、ちっきしょー、と思ってあたりをみまわしました。

ところが、でした。そこには、ほろ酔い加減のもうひとりの路上生活者のひとが立って

いました。「僕にはくれないの？」何歳くらいのひとかわかりませんが、60歳くらいなのでしょうか。でも子供みたいにあどけなく「僕のふんはア？」と言うのです。もうひとり、いたのか！私はしまったなあと思いながら「もうないの。3つしか持ってなかったの。ごめんなさい」とからっぽの白いビニール袋を振りました。そうしたらおじさんは、ちょっと残念そうにして次にこう言ったのです。

「じゃあ袋ちょうだい。その袋ちょうだい。」

袋って……。コンビニで何か買うたび残るような半端なビニール袋。普段毎度捨ててるビニール袋。それをねだられてしまったのです。私は果てしなく悲しくなりました。どこかの国に旅行しているのではありません。自分の地元の街です。自分の倍くらい生きてきた年配のひとに、ビニールの袋を欲しいとお願いされたのです。袋をおじさんにあげた足で、わたしはまだ眠っているおじさんのところにさっき置いた林檎を失敬してきて、ビニール袋のおじさんにあげました。なんだか自分でもよくわからないまま。「ありがとね。ありがと。ほんとにありがとさんです。」寒さしのぎにコップ酒でも一杯やっていたのか、ちょっとよろけながらご機嫌そうに拝まれたり、手を振られて、わたしは見送られました。

これが、この冬はじめて、労福会の存在を知り関心を持つようになったきっかけです。北大の法学部の学生の方達が炊き出しをやっているという話は以前に耳にしたことがありましたが、「すごいなあ」と思ったままでした。今回、会の名前や連絡先の窓口を紹介してくれたのは、札幌タイムスさんです。

1月26日の活動にはじめて参加したきりで、まだたった1回のみで、夜の会議も出席できてないのですが、本当にどこにもないような素晴らしい活動だなとため息がこぼれます。路上生活者のひとたちの心の大きな支えになっているにちがいないと思いました。

太田 晶子 北海道大学法学部3年

札幌に来て初めての冬、鉄道高架下に数十個のテントが張ってある光景を目にし、衝撃を受けた。以来、「彼らはなぜこんな厳しい寒さの中、外で暮らさなければならないだろう」と心に引っ掛かっていた。理由を知りたいと思った。それが、私がこの会に参加した動機だ。

正直、始めはホームレスの人たちに恐怖を感じていた。しかし、彼らと話をするうち、職を失い、路上で生活せざるを得ない状況にある人たちが多くいることを知った。ホームレスの暴行事件が起きる原因の一つは、彼らの背景事情を知らないことによる偏見、恐怖などではないだろうか。こうしたことを防ぐためにも、まずは、一般人にもホームレスのことをよく知ってもらうことが必要だと感じた。

この会に参加してから1年が経つが、今も考えつづけていることがある。それは、ホームレスの人たちにとって一番良いことは何だろうか、ということ。会の目的は、ホームレスの「脱路上」だというのが、会の存在は彼らの依存体質をつくっていないだろうか、と疑問に思ったこともある。ただ、食べ物や衣服は命に関わることだから、援助は必要だと思う。2ヶ月に1回の炊き出しは単なる食べ物の提供ではなく、コミュニケーションの場であることもわかってきた。厳しい環境で暮らす中、会が彼らの心の支えになっているのも事実だ。

しかし時々、会の価値観を押し付けているのでは、と感じることもある。夜回りで話し

かけようとする、「放っておいてくれ」と言う人もいる。12月に行われた健康診断会で、学生が参加したホームレスに診断を強く勧めて怒鳴られたこともあった。当然のことかもしれないが、大事なのは彼らの考え方、生き方を尊重することである、と再認識させられた。

「なぜあなたは会に関わっているのか」という問いに対しては、彼らと関わることによってホームレスを取り囲む様々な問題を考えていきたいからだ、ということになる。活動していく中で、家族の問題、助け合うことの意味など多くのことを学んできた。けれど、相手のことをきちんと理解しないまま生活保護の同伴をしたり、職探しの手伝いをしたりすることは、果たして本当に正しいことなのかはわからない。炊き出しに参加した人に一緒に生活保護を勧める姿勢にも違和感がある。どこまで会が介入すべきなのか、線を引くところを見定めるのは難しい。また、札幌にいるホームレスは約80人で、今のところ把握できるからいいが、今後人数が増えていったときにどこまで一人一人と向き合えるだろうか。会自体の規模も大きくなりつつあり、学生ボランティアの域でどこまでやれるのだろうか、など問題を多く抱えていると思う。会議などを通じて、これらの議論が活発に行われるようにしたい。

#### 山内 太郎 北海道大学教育学部博士課程1年

労福会に所属することで路上生活者といわれる人の何人かに会うことになった。丸3年労福会の活動を続けてくれば、何が問題なのかと聞かれれば何か言えそうな気にもなるが、一言では説明がつかなくて、むしろやっぱりわからないと思うところもある。

- ①路上生活を余儀なくされている人たちがいる。
- ②路上生活は問題だから居宅生活を送れるために活動をした。
- ③結果、その人たちは居宅生活を送ることになった。」

「路上生活」を問題にするのなら支援のかたちは極端に言えばこれで終わりだ。ところが「路上生活“者”」となると話はややこしい。

年齢によって仕事がないということや保証人が立たないから住所が持てないことなど本人の努力のみではどうにもならない問題だなと感じることはよくあった。路上生活者が本人の意図しないところで構造的に生み出され、抜け出せないでいるとすればそれは問題だ。社会的なサポートがもっと必要だと思うし、これまで労福会でもこの辺が活動の背景にあったと思う。そしてそのことは間違ったこととは思えない。

しかし、本人の努力ではどうにもならない部分があるのなら、その裏返しに本人の努力で何とかなっていた部分というのが他方で存在するとも思う。でもその境界線がどこなのかよくわからないし、路上生活者支援に関わりを持っている場合、このことを考えると途端に途方もない感じがしてしまう。支援する側にとってはそこをあまり問題にする必要はないような気がするが、しかしこの手の事情は関わっていけばイヤでも見えてきてしまうのも事実で、またそれが無視できないほどその人の生活に影響している場合があるなど思ってしまうことも度々だ。誰だってサボりたいときや、なんだかメンドクさいから放つたらかしにしちゃえと思ってしまう瞬間はあると思う。ただ、活動の中でその人のそういった場面に遭遇するときがあって、「でもそこで踏ん張らないとイカンだろ」とか「もうちょっと頑張りましょうや」と思うときもあったし、「この人はもう仕方ないのかな」と思うこ

ともあった。ところが事はそう単純ではなくて、話を聞けば彼らがそうしてしまうことは彼らなりの理由があったり、「じゃあどうすればよいのか？」ということを見ると示せる選択肢がなかったりして、やっぱりこれも本人のみの問題ではないという結論を出しそうで、かといってホントにそうなのかとも一方で思ったりして…

そもそも一つにまとまるような話ではないのかもしれないが、だからといって考えなくてよい話でもない。実際に問題の中心にいる人たちの関わりを持たば必然的に考えざるを得ないということもあるが、必要以上に背負い込む必要もないと思う。はっきりとした答えの出せないことを自覚しながら実践も行って以上、当然悩みや失敗を伴うことになるが、それらは同時に肯定的なものだ。労福会の活動を通してメンバーは様々な意味で飛躍的に成長したと思うが、成長することを目的にして関わるメンバーは誰一人いなかったし、だから労福会は活動自体が嘘臭くなくて魅力的な団体なのだと思う。これからも悩みや失敗を繰り返しながら活動が続いていくのだろう。私はそんな労福会が好きだ。

#### 芳賀 光治 北海道大学医学研究科

##### ホームレス自立支援活動～平成14年度の実践から～

1999年末から始まった支援活動も年が明け、4年目を迎えました。毎回の企画ではピラ配りに始まり、炊き出し、健康・生活相談が行われ、その後は引き続き役所や病院への同伴、アパート探し、夜回り、実態把握調査を行い、時には脱路上した当事者の居宅訪問をするなど、さまざまな苦労を重ねながらも活動は根気強く継続されてきました。

平成14年度の実践を顧みるにあたり、これまで活動を支えて下さった方々にまずは感謝の意を表します。同時に、事務局運営に労を惜しまずに取り組んできた学生諸君に対し、一會員の立場から敬意を表したいと思います。

##### (1)健康相談について

これまで私は主に健康相談部門を担当してきました。学生諸君(医・看護系も含む)の熱心な協力を得て、尿検査、血圧測定、問診を行い、それらの結果から精査や入院の必要性を総合的に判断し、緊急性のある方々を、生活相談部門の担当者につなぐというものでした。簡単な治療処置を行うこともありました。

今年度も、高血圧症や糖尿病の疑いのある方が少なからず見出されました。食事の摂取不足はもとより、栄養の偏り、特に、野菜の摂取不足傾向は相変わらずでした。免疫力低下も関係しているのでしょうか、7月に実施した企画では、夏にもかかわらず風邪気味の方が多くいました。残念ながら、在庫不足のため(準備不足も一因ですが)、必要量を提供できませんでした。会の財政事情にもよりますが、来年度は、かぜ薬、胃腸薬、消毒薬、湿布剤などの市販薬をもう少し確保しておきたいと思います。

今年度のトピックは、「健康相談祭り」の開催でした。民医連のご賛同のもと、総勢40名の職員の方々のご協力をいただき、これに30名の学生・市民の方々も加わり、2002年12月には検診車も動員した本格的な健康相談会が、2003年1月にはそのフォローアップ相談会が行われました。

受診者は46名でした。検査結果の詳細は民医連のご報告にお任せしますが、「異常なし」のケースは少なく、半数は「精査や治療」の必要なケースであったといえます。また、要治療と診断されたケースにはやはり高血圧者や糖尿病患者が多く、痛風の方も含まれていたと

のことです。

通常健康相談会で把握しきれないケースを数多く見出すことができた点からも、今回の健康祭り開催の意義は大きかったと考えます。ここに改めて民医連関係者の皆様に感謝の意を表したいと思います。ただ、本格的な検査にはかなりの費用がかかります。幸い、今回は行政からの補助があったようですが、その継続性は必ずしも担保されておりません。ホームレスの方々の心身の健康は苛酷な生活の中で、確実に蝕まれています。労福会の通常健康相談活動を充実させる努力をする一方で、他のさまざまな機関とも連携を深めていくことが今後とも必要であると考えます。

## (2)マンパワー問題について

現在の労福会の実践は、いわゆるボランティア活動に相当するでしょう。ボランティア活動の最大の弱点は何といってもマンパワー確保の不安定性にあります。それは会の「活動の質」に直結することになります。その点から、参加者の皆さんに対しては、細々でもいい、できれば長期的に継続して関わっていただきたいと思うわけです。

一般的ボランティア論では、ボランティアにはその活動に参加した場合、「何らかのメリット」が必要だといわれます。例えば、1)自分自身の可能性を感じたり、新しい自分に気がついたりできる、2)活動を通して、知識や技術の習得につながる、3)地域社会とかかわることにより、自分自身の生活に変化やうるおい、そして充実感が生まれる、4)講座や情報交換のネットワークづくりを通して、仲間の輪が広がる、5)自分自身の手で住み良いまちづくりに参加することができる、などです。

労福会の活動である、生活相談、夜回り、生活保護課や病院への同伴などは、実のところ、ボランティア活動としてはレベルが相当高いものです。ですから、初参加の方にしてみますと、「私も何かしたい」という当初の気軽な思いはたちどころに吹き飛んでしまうでしょうし、かなり大変な、気の重い活動だという印象を強くもってしまうかもしれません。もしこのことが継続した参加の障壁になっているとしたら、非常にもったいない気がします。その意味では、例えば、参加者に対して、会として何らかの目に見えた「評価」をするとか、一般市民にも資する生涯学習という視点に立ち、魅力あるテーマの学習会を開催するとかいうように、特に初参加の方々に対する何らかの「動機づけ強化」策を考えなければならないかもしれません。「大変である」を「得難い経験である」という感覚に変えるには一体どういう工夫をすればよいか、労福会の来年度の課題のひとつであるように思われます。

## (3)自立サポート施設について

現在の労福会の活動内容は、乱暴に言ってしまうえば、医療機関や救護施設を経由して、あるいは善意家主の経営するアパートを経由して行政（生活保護申請）につなげるというプロセスへの支援が中心になっており、これに生活保護受給中の居宅者への不定期訪問が付加されているといったものではないでしょうか。限られたマンパワーや予算の中で、これまで一応の成果を挙げてきたことは間違いのないことですが、一方で「本当の自立とは、自立支援とは何か」という新たな問いが出てきたのも事実です。最近の事務局会議では「脱野宿化後」が度々話題になっています。

せっかくホームレス状態から脱することができたのに、再びホームレス状態に戻ってし

もう人が少なからず存在するのは一体何故なのでしょう。もちろんすべてを労福会だけで受け止めることは難しいのですが、真の自立支援活動に至るまでにはまだまだ余地があるということは確かになってきたわけです。この辺りを検討することが労福会にとっての来年度の大きな課題であるように思います。

ところで、他の地域では同様の支援活動を行っているグループの中に、自立サポートのシェルターやアパートなどを、例えば NPO 方式で独自に運営をしているところがあると聞きます。詳細は分かりませんが、これによりおそらく住所・保証人問題、就労支援、精神的サポートなどの課題が少なからず解決されているのではなかろうかと推測されます。

今日本の各地では、まちづくりなどに NPO を活用しようという活発な動きがあります。行政でも、企業でも行わないが、公共性のある分野を NPO が担っていこうという気運です。シェルターを NPO で運営していけるかどうかについては議論が必要でしょう。しかしながら「自立の支援」をより確かなものにするために、将来的には労福会でもこうした自前の自立支援施設を運営することについても検討を進めてほしいと思っています。

#### 諏訪 絢子 北海道大学法学部3年

この会に関わるようになってから2年経ち、過酷な活動を経て、私も随分変わりました(笑)。今年度の労福会には事務局長という役目をもらったこともあり、いい意味で主体的に関わることができたと思います。はじめの1年は「路上生活者問題」について、路上生活者に対するケアが不十分なのは社会の責任があるとかないとか、抽象的なことを結構真面目に考えていましたが、2年目からは事務作業に忙殺され、活動を常に客観的に見るようになり当事者の抱えている問題についてもいちいち巻き込まれなくなりました(もちろん“慣れ”もありますが、つかかかっていると活動が先に進まないの)。

このように、2年間路上生活者の方と、自分が望むと望まないに関わらず継続的に関わりつづけ、「自立」についての考え方が変わりました。自立は一人で生きていくことではありません。某元事務局長は退任の際に、「一人じゃ何もできないことを知った」という名言(!?)を吐きました。おそらく、これが「自立」の本質なのではないでしょうか。

例えば、路上生活をしている人が調査か何かで、突然、生きる目標を問われたとします。それは仕事を得るとか衣食住を得るといった物質的なニーズが満たされることになると思います。それが満たされれば、とりあえずなんとかなるかな、と。しかし、いざ生活保護が適用されて最低限の生活が保障されてしまうと、意外にも自己管理は難しい(夏休みは3日で飽きて、それから先はだらだら過すのと同じ)。仕事を探すとか病気を治すとか制度的に「まっとう」な生活の目的はあるのですが、それらは世の中から与えられた目標にすぎないので、本人の「自立」にはあまり効果的には働かないという気がします。誤解を招くことがないように断っておきますが、私は決して生活保護を軽視しているわけではありません。あと、「自立」を考える前提には衣食住が満たされることが必要だということも忘れてはいけません。ただ、究極的にはどうなのでしょう。

思うに「自立」というのは、副代表の入れ知恵という噂もありますが、“他人にうまく頼っていきける(注:依存ではない!) =居場所の確保”ということにつきるかな、と痛感しています。一人一人の人生においてそれはいったいどのように可能になるのでしょうか?とりあえず、一回は誰かにとことん依存してみるのもいいかもしれません。あるいは

は、プライドはできるかぎり持たないほうがいいのかもしれませんが。

労福会は、路上生活者の方々にとっての「居場所」にはなりえないと思います。学生を頼ったら、その学生も一緒に共倒れしかねないからです。学生は弱いです。「まず、お前が自立しろ！」と突っ込まれそうです。だから「自立」支援といっても胡散臭さが残りますよね。決して居場所を与えることはできないと思うので。ただ、この活動が、当事者に関心を持っていることを大々的に掲げて関わろうとしているというところで、また、不完全ながらも、もがいているという若さによって、居場所を見つけるためのきっかけ＝希望、になればいいなと思っています。最近は強力な市民の方々が生徒の不十分さを補ってくれています。会は多分つぶれないでしょう。今年一年お疲れ様でした。皆さん、お互いに助けあいましょう！

#### 小西祐馬 北海道大学大学院教育学研究科修士課程2年

今年度、僕は修士論文執筆のため、会の活動にはほとんど参加しませんでした。会としてはいくつもの新しい展開があったように思います。札幌市や他の団体との協力関係の構築、学生以外の方々の活動への参加等は、率直に喜ばしいことだし、会がこれまで着実に活動を重ねてきたことの成果として評価すべきことでしょう。メーリングリストで情報が上がってくるたび、そう感じていました。もちろん、そういった成果の影には、多くの負担を背負ってきた方々がいて、そのことが「人手不足」、「会の運営の難しさ」といった問題（というか悩み）として、今年度も挙がっていました。これは会設立当初からの悩みであり、2001年3月に東京・渋谷の「のじれん」を個人的に訪ねて行った時に、真っ先に窺ってみたことです。（ちなみに、その時の答えは、「当事者が手伝ってくれるから、人手は足りる」というもの。）しかし、この問題に関しても、これまでの試行錯誤の中から、少しずつ解決の糸口が見えているようにも思います。この先しばらくは同様の状況が続くのでしょうか、何とか新しい局面に向けて模索していけば、道は開けるのではないのでしょうか。

会が設立されてから、3年以上が経ちました。おそらく、炊き出しに参加する人の顔ぶれは、全く様変わりしているのだと思います。多くの人が居宅に移っても、野宿者の人数が一向に減らないという事実、そして、居宅に移った全ての人が「自立」できているわけではないこと、「再野宿化」してしまう人がいること等を考えると、やはりこれは単なる一過性の現象ではなく、根の深い問題だと再認識せざるを得ません。

全国的にみれば、昨年は「ホームレス」という言葉が使われた初めての法律ができ、大規模な調査も国によって行われました。他地域では自立支援事業の成果が問われてくるでしょうし、若者による襲撃事件なども考慮に入ると、この先数年は野宿者問題に関する議論はより多くの人を巻き込んだものになっていくと思われます。こういった流れの中で、より広い視野から自らの立ち位置を確認しつつ、動きながら、悩みながら、試行錯誤を続けていきたいと思います。

### 炊き出しへの参加と戸惑い

昨年秋に、札幌では初めて「炊き出し」に参加しました。ホームレスの人を対象とした炊き出しに参加したのは、初めてではなかったのですが、それでも身の置き所がないという感じでした。初めて会った方にどう話しかけたらいいのか。「体調などは如何ですか」「うん、まあ」……（沈黙）……「夜はいつもどのあたりにいらっしゃるのですか」「～〇×かな」……（沈黙）……「寒くないですか」「そりゃ、寒いよ、外なもの」（あつ、何という質問をしてしまったんだ!!!）という感じです。しかし夜回り、炊き出し、健康診断、生活保護希望者の同伴で区役所に行ったりしながら、名前では呼べる関係になると、野宿の人が特別の人ではなく普通の人に、普通の関係に変わって行きました。～さんと普通に呼び会える関係が大切なんだなと感じました。

### 生活保護申請同伴の経験から

生保の同伴では多くのことを学びました。私が同伴した人、二人共、生保申請は初めてではありませんでした。前にひとりで申請に行って、断われたり、怒られたり、色々言われて嫌になって「それならいいです」と帰ってきたのだそうです。同伴がいても、門前払いということもよくあります。二人目の人の場合がそうでした。そういう時は同伴した自分の不甲斐なさを感じました。

この間、生保というものが弱者の為のものでありながら、一番の弱者には難しくなっていることはどういうことだろうかという疑問が常にありました。その一番顕著な例が、健康診断の要検査という結果が出た人の生保申請の場合でした。入院すれば病院を住所に生保の申請ができますが、一番悪い事態は、入院するほどではないが、通院する必要がある場合で、そのようなケースはMLの同伴報告でもよく報告されています。私の同伴した人もそうでした。その時は私の代わりに同伴者が「ホームレスだから通院ができない」と主張して、「それならば」と担当医が入院の手続きをしてくれたそうです。私が同伴していたら、そういうふうには言えて、入院できたかどうかわかりません。

生保同伴経験でわかったことはたくさんあります。同伴する人がいないと、門前払いで、同伴する人がいると申請できる。それも誰が同伴するかによって結果が違って、生保が受けられたり、受けられなかったりする。しかも住所の問題がネックになって、一番必要な人が受けられなかったりする現状。これらのことは何を意味するのだろうかと考えました。一方生保についての豆知識などをMLを通じて教えて頂き、システムについての正しい知識を持つことも教えられました。生保の問題の多くは、全く法律の不備というのではなくて、法律ではそうなっていないのに、運用という現実の場面でそうなってしまっていること。しかし同時に病院や部屋探しに同伴してみると、医療機関、福祉機関、市民の方々の中で、ホームレスの人の為に努力をされている方が少なからずいるということも知りました。このような本当に複雑な現状は、生保の申請に同伴するまで、話しでは聞いていても、現実のものとして受け止められなかったと思います。

## 現実から——野宿者の問題からマイノリティーの問題へ

労福の活動への参加という形で現実にホームレスの人と相對してみると、何を話したらいいかわからない、どうしていいかわからないという戸惑いにまず突き当たります。しかし一緒に打ち合わせをしたり相談したりしながら区役所に行ったりする中で、特別な人から一緒に活動する関係に変わっていくことも体験しました。このような体験は同時に、福祉、医療、法律、行政、市民・大学などとの複雑な関係が見えてくることでもあるように思います。人権とは何なのか。マイノリティーの問題を考えていく時に、まずはこの複雑な現実を個人的な印象をも含めてしっかり見ていかなければならないと思いました。

坪田 裕佳 北大教育学部4年

### 「自立支援」とは何か

今年は私にとって、あまり会の活動に積極的に参加できなかった一年となってしまったが、そのなかで感じたことを記しておきたい。

とくに感じたことは、「路上生活者の自立を支援する」ということの難しさである。私は昨年末に、一人の路上生活者の方を居宅・生活保護につなげることができたのだが、それまでの役所への同伴や家探しなどで、当事者の方との連絡が取れるようにしなければならぬため、自分の携帯番号を教えた。それはどのメンバーもやっていることだし、私も役所に同伴するときはずっと自分の番号を相手の方に伝え、何かあったら連絡をくれるように言うようにしている。その方は結局、数ヵ月後にアパートを出て、また路上に戻ってしまったのだが、今も精力的に職探しや日雇い労働を続けているようである。そして、「現状報告」というかたちで頻繁に私に電話がかかってくるようになった。初めは私もその方が心配だったということもあり、仕事を頑張っているというのを聞いて嬉しく思っていたが、そのうちあまりにも頻繁に電話がかかってくるようになり、これはボランティアとしての自立援助という範囲を越えていると感じるようになった。それからは、なるべく電話に出ないようにするなどして対応してきた。

ボランティアである私たちは、少なくとも私は、あくまで支援者として当事者の方々と関わり、役所への同伴などを行っている。けれど当事者の方々にとってそれは、自分の全生活がかかった一大事なのであり、そこには必然的に、「気持ち」のギャップが生まれる。路上で生活するということは、支援者である私たちには想像もつかない孤独感や悲しみ・苦しみが伴うと思う。そんな生活のなかで、暖かい手を差し伸べる（と自負していますが）支援者の存在は、彼らにとってはどのような存在となりうるのか。私たちは一体、彼らにとってどんな存在であるべきなのか。感情をもった人間どうしの関わりという意味で、そこには単なる「自立支援」という枠内には収まりきれないものがたくさん内包されているように思う。そしてそれはプラスに働くものもあれば、マイナスに転じてしまうものもあるのである。

当事者の「自立」は、支援者にとっても「自立」である。支援者はつねに支援者としての「自立」を保ち続けることで、当事者の「自立」を支えることができ、当事者も真の意味での「自立」を遂げることができるのではないか。そんなことを考えた一年だった。

小野寺 ひとみ 札幌医科大学

私が労福会の活動に参加し始めたのは、去年の5月。今までに朝のピラ配り1度と生活健康相談会に3度参加しています。私は今までに数回、ベトナムでの幼稚園建設ボランティアや、フィリピンでの井戸建設ボランティアなどに参加したことがありますが、そこには、距離的なこともあり継続的に活動を続けていくことに困難を感じていました。もっと身近で継続的に自分の今学んでいる看護を生かしていける活動はないだろうかと思っていたところ、この労福会に出会い、微力で不定期的ながらも活動に参加させてもらっています。

5月に初めて参加した、朝のピラ配りでは、寒い朝に足にスーパーのビニール袋を巻きつけて少しでも寒さをしのぎながら新聞紙の上で眠る路上生活者達に驚き、自分で何年もこのあたりに住んでいながら、全然その人達に目を向けていなかったことに気づいて愕然としました。そして、今まできっと存在すら気にも留めず、気付いても避けて通っていたかもしれない人達とその日初めて話をし、路上生活の方々は、たまたま運が悪くて職をなくしてしまったり、たまたま家族と色々あって居場所をなくしてしまった普通の人達なのだ、そして誰にでもそうなる可能性がありえる存在なのだなと知りました。活動に参加した私の大収穫は、実際に関わることがなかったら知り得なかった路上生活の方々の存在がどういうものかということ、少しでも知ったことだと思います。

私の労福会での活動は、主に健康相談会での問診、血圧測定、尿検査などです。そこでは、血圧がすごく高くて本当に身体に問題があるのではないかとと思われる方、症状はみられなくても路上生活で自分の健康が心配だと思っている方、皮膚が痒いと訴える方など様々です。私はその場で、話を聞いたり、コミュニケーションをとりながら手動で血圧を測定することで少しでも安心感を与えられたらいいなという思いでやっています。本当は、今、労福会の皆さんが頑張っているように、健康に少しでも問題がある人が、病院にお金の心配なしに行けるような、そしてそこから自立した生活を送れるような援助をしていけることが一番です。だから、そこで私がしていることは、すごく微々たることで誰の何の役にもたっていないかもしれないし、私の自己満足で、まだまだ学びの段階なのですが、将来看護師デビューをしてから本当の意味で役に立てる時が来ると思っています。

これからも出来るだけ活動に参加できたらいいなと思っているのでよろしくお願いします。

#### 匿名希望

椎名先生と諏訪さんにとってもお世話になりました。勤医協の菊水病院の先生、中央病院の先生、social workerの方々にもっともお世話になりました。おかげで現在は安心して居宅生活をする事ができています。

その後支援する側としても会と関わらせていただいています。いろいろとわからないことがとても多いので、その都度椎名先生や諏訪さんに教えていただきながら生活保護や病院への同伴をさせていただきました。

どうもありがとうございました！

私は今回で 3 回目の総会を経験する。労福会が成立した当初から参加したが、今、あらためて思い起こすと、自分と労福会との距離というのが、当事者との関わりのなかでいろいろと変化してきたように感じる。

労福会に関わるきっかけは人それぞれだと思う。友人から勧誘された人、新聞記事やホームページで関心を持った人、だまされた人(笑)などなど……。私の場合、3 番目というものもあるが(逆に、私にだまされた人たちも少なくない……)、やはり、関心があったというのが一番大きな理由だと思う。労福会の対象とする人たちが、路上で生活する人たちということで、安易な気持ちで踏み込んではいけないようなためらいもあったし、「本当に路上で生活している人の気持ちが知りたいなら、一緒に路上で寝てみなければわからん」と叱られたこともあった。「路上で寝てみる!」と言われたときは正直困った。「いやだ、そこまでしたくない」と思ったからだ。今でも、そんな自分が労福会とどう関わっていったらよいか時々考える。

「路上で生活している人たちに何か手助けができればいいのに」と思う反面、「いつまでも、とことん深く関わってはいられない」という逃げ腰になることもある。だから、困ってしまった時、結局、「仕方ない」というふうに割り切ってしまう。尤もらしい理由をつけ、都合いい時にだけ「いい顔」して、当事者から感謝されている自分を卑怯だと思うことがある。どこで割り切るのか、その決断は関わっていく人たちそれぞれにゆだねられている。だから、難しい。

私が 1 回目の総会を経験したころは、その「仕方ない」の結論は早く、しかも多用していた。そのころは、私と労福会の距離が最も離れていたように思う。会議にはよく顔を出していたが、当事者との付き合いが皆無に等しかったし、そのことを心密かに望んでいた。複雑な問題には足を踏み入れようとせず、口先だけでいろいろ言っていたあの頃「仕方ない」「どこで割り切るのか」について深く考えることもなかった。

2 回目の総会を経験したとき、事務局の中心メンバーだったため、労福会との距離は近かったというより、私の 1 年は労福会そのものだった。あれはしんどかった。また、当事者との関わりも急激に増えた。その結果「仕方ない」の結論で事を済まそうとすることも少なくなったし、これまでのように何でも簡単に割り切れなくなってきたことに気付いた。結局、当事者との間でのごく自然な「納得」や「理解」に近いものによって、付き合う範囲を限定していったのだが、今思えば、これは、ただ私にとって都合のいい付き合い方をしていたにすぎないのかもしれない。

そして今回が 3 回目にあたる。今年は今までのなかで最も労福会に顔を出す回数が少なかった。ただ、生保同伴などで仲良くなった当事者がいるので、1 回目の総会のことよりも何かと関わる機会が多い。そのせいか、会議にほとんど出ていなくても、私と労福会との

距離はかなり近く感じる。やはり労福会は、当事者との関わりがあって何ぼだと再確認できたし、関わりを持っていることによってはじめて、自分たちの活動の意味について考えたり、実感できたりすると思う。こうして3年半、労福会にいて感じることは「仕方ない」という言葉は「本当に仕方ないことなのか」ということだ。とても都合がいい言葉だと思うが、はじめから安易にその言葉をつかって逃げないほうが、みえてくるものも多いように思う。これから参加していく人たちにも、当事者との関わりとのなかで、最善だと思う「支援」の方法を悩みながら、見出していくという過程をぜひ踏んでいってほしいと思う。それが労福会との距離を最も縮める道であるし、労福会の活動の醍醐味を味わえる方法ではないかと考えている。私もまた1年、当事者の人たちと一緒に「本当に仕方ないのか」「どういう関わり方が望ましいのか」の答えを求めて、悩み続けていこうと思う。

## 10. 来年度役員の紹介

顧問 杉村宏（法政大学現代福祉学部教授）  
 代表 権名恒（北海道大学教育学部助教授）  
 副代表 佐々木宏（北海道大学教育学部助手）  
 副代表 芳賀光治（北海道大学医学部助手）

事務局長	安部薫道（北海道大学法学部2年）	
事務局幹事	山内太郎（北海道大学教育学部院生）	小西祐馬（北海道大学教育学部院生）
	人見泰弘（北海道大学教育学部院生）	諏訪絢子（北海道大学法学部3年）
	中明結花（北海道大学医学部5年）	権名結実（北海道大学法学部3年）
	寺嶋祐一（北海道大学経済学部1年）	桂守弘（札幌医科大学5年）
	村井政人（北海道大学教育学部院生）	太田晶子（北海道大学法学部3年）
	南部葵（北海道大学教育学部4年）	坪田祐佳（北海道大学教育学部4年）
	近藤修平（北海道大学教育学部4年）	上西知子（北海道大学教育学部院生）
	藤堂美紗子（北海道大学文学部3年）	佐々木朋子（北海道大学文学部3年）
	堀朋子（北海道大学教育学部3年）	塩崎満子（強力な市民）
	鈴木諭（強力な市民）	中川雅紀子（強力な市民）
	本間朋子（強力な市民）	眞鍋千賀子（強力な市民）

## ❖ 2002年夏札幌路上生活者人数確認調査のご報告 ❖

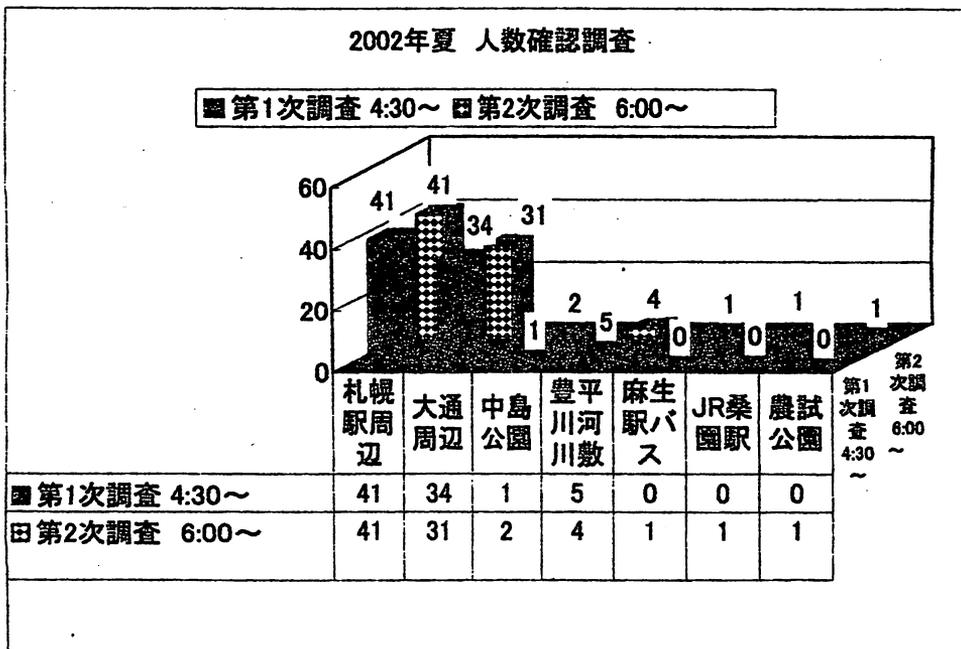
2002年7月6日(土)早朝、私たち「北海道の労働と福祉を考える会」の活動に参加している学生を中心に、札幌市内で生活している路上生活者の人数確認調査を行ないました。この人数確認調査は、毎年、夏と冬に実施しており、札幌市内のどこにどれだけの上生活者が生活しているのかを把握するとともに、調査実施ごとの人数変化をみるためのものです。

調査は、第1次(4:30~6:00)と第2次(6:00~8:00)の2回、学生がペアを組んで、市内の中でも路上生活者がいると予想される区域を目視確認という形で行ない、下記のグラフに示したような結果となりました。調査場所は<札幌駅周辺・大通周辺・豊平川河川敷・中島公園・円山公園・月寒公園・真駒内公園・ポニー公園(18条)・農試公園・地下鉄駅沿線・JR線各駅(札幌中心部)>で、「すすきの」は大通周辺として集計しています。このうち<円山公園・月寒公園・真駒内公園・ポニー公園>は確認されませんでした。確認された合計は1次が81名、第2次が82名ということでしたが、路上生活者かどうかの区別がつかない人たちや、「すすきの」のように寝床の場所が特定できない区域も多数あるため、実際には今回の調査で確認できた人数よりも多くの路上生活者が札幌にいると予想されます。また、調査参加人数にも限りがあったため、札幌市内全域をカバーすることができなかったことを付け加えておく必要があります。

次に、今回の調査結果についてですが、今まで同様、札幌駅周辺、大通周辺に路上生活者が集中していることや、第1次調査(4:30~)と第2次調査(6:00~)では人数にあまり大きな変動が見られなかったことなどがあげられます。

以下のグラフは人数を確認できた区域の結果です

※ 上記の「麻生駅バス」は「地下鉄南北線麻生駅バスターミナル」のことです



2002年度総会資料の内容の訂正

※目次番号に応じて訂正しました

3. 北海道民医連との協力

4行目；会社員→市民

表A；11. 男→男\*（昨年も同伴した方）

4. 生活保護申請同伴結果のまとめと課題

2. 同伴結果のまとめ5行目；6名→5名

〃 8行目；25件→26件

〃 11行目：信頼関係を築くことに関して

→信頼関係を築くことができた

「私と労福会」 北海道大学文学部 4年 人見泰弘

今回は3回目の総会。つまり3回目の感想を書いているわけです。今年度は卒論と言う個人的なお仕事が増ったため、以前よりも顔を出す機会が減ったような気がします。企画などは事務局長他の3年生を中心に行ってもらったため、会の本業にはあまり関われなかったというのが率直な感想です。

この1年で会の活動はより拡大しました。大きな点は民医連との連携によって、医療面からのアプローチがしやすくなったという事があります。労福会が採る事ができる選択肢が増え、生活保護を受けられる可能性が広がりました。また札幌市とも一部で連携する事になり、会の認知度が以前よりも高まった事を示した年だと思えます。

一方で、問題もありました。1つは以前から続く、生活保護制度のあり方。特に「入院して保護を受ける」という運用についてです。逆説的に言えば、これは「入院するほどでもなければ保護できない」という論理になります。では「入院するほどでもない野宿者」は保護の対象になるのかどうか。良く言われる『最低限度の生活』って何なんだろう? という事になるわけです。生活保護制度の本質を改めて考える事にもなりました。

もう1つは生活保護の後の事について。取りあえず、会では自立の意思のある人に、生活保護で生計を立て、彼らの自立を促すというスタンスを採っています(細かい意見は省略するところなるはず)。これまでの状況では、無事に就労できた場合を除くと、いったん生活保護を受けても再び路上に戻ってしまう場合、また居宅に移っても年齢等が理由で就職が難しく、ただ時間を過ごしてしまうだけの場合などがあります。つまり「生活保護が直接『自立』に繋がるのかどうか?」という問題です(個人的にはこうした事例が「自立」したとは捉えられないのですが)。会の中では「脱路上後」と専門語化してきているものです。結局は「自立」が何を意味するのかによって変わる事なのでしょうが、生活保護を進める以上、その意味を考える必要があります。

結局、会の議論を整理しただけのような感想文になってしまいました。個人的に「自ら立つ」事の意味をはっきりと捉えられてはいない状況です。もうしばらくここには居座る予定なので、この意味が少しでもはっきり捉える事ができるように、また考えていきたいです。